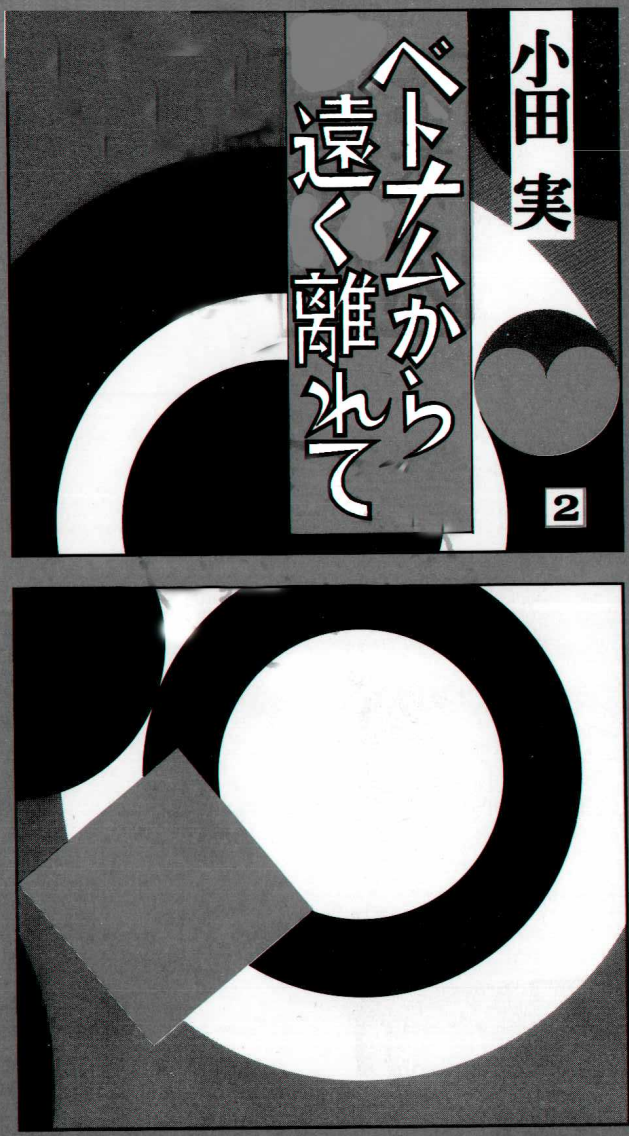
小田実

ベトナムから遠く離れて

2



講談社

ベトナムから遠く離れて　2

一九九一年八月二十六日　第一刷発行

著者——小田　実

© Makoto Oda 1991, Printed in Japan

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—一二—二一　郵便番号一一二—〇一

電話　出版部（〇三）五三九五—三五〇四
　　販売部（〇三）五三九五—三六二二
　　製作部（〇三）五三九五—三六一五

印刷所——信毎書籍印刷株式会社　製本所——株式会社黒岩大光堂

定価——四七〇〇円（本体四五六三円）

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第一出版部宛にお願いいたします。

目次

第十二章……五
第十三章……一二六
第十四章……三一七
第十五章……四〇四

装丁　田村義也

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ベトナムから遠く離れて　2

第十二章

一

おかまはときどき女装するようになっていた。そのときにはグエンのマンションにまで出かけて、彼の白いワードローブに丁寧にしまい込まれたワンピース、ツーピース、スーツとさまざまな服を借りて着る。アオザイも試してみた。グエンがどのように派手な原色のものよりこれ見よがしにあでやかに着こなした純白のアオザイなら、おかまは真紅のアオザイを若い女性らしく明るくはなやかに着て、二人並んでワードローブのつい横手の大きな姿見のまえに立つと、まるでほんとうにベトナム人の仲のよい姉妹が仲むつまじく寄りそって立っているように見えた。二人ともにそれぞれに美しい姉と妹だ。姉のグエンが自分の着慣れたアオザイ姿の美しさに十分に自信をもった既婚の若い女性なら、おかまは優美なからだの線に既婚者の落ちつきと貫禄をみなぎらせた姉のそばにいくぶん自信なげに立つ未婚の妹だった。姉のゆたかな胸（はもちろんブラジャーの下に詰め込んだパッドがつくり出したゆたかさだった。そういうニセモノがきらいでおかまは女の服は着てもパッドで胸をふくらませたりはしていなかったが、たとえそうしてみたところでグエンの胸のようにはゆたかにならなかったにちがいない。大きさの問題だけではなかった。グエンの胸はその曲線と言いふっくらした弾力性に富んだやわらかさといいほんもののゆたかさをふしぎにもっていた）に首をかしげて頭を押しつけるようにして未婚の処女の妹は立って羞ずかしげに微笑していて、その姿はみごとなほどたよりなげで可憐に見えた。

おかまの眼にだけ二人の背丈ほどの大きな鏡のなかの彼ら二人がそんなふうに見えているのではなかった。海坊主のアンリ・ブールデは二人が競争するように女装し出すのをいつも自分の美しい年ごろの娘二人がおめかしするのを眺めるように満足げに微笑しながら見ているのだが、見ている途中で姉のグエンの首筋のところに感にたえたように唇を軽く音をたてて押しあてながら「それでいつ子供ができるのかね」と言い、妹のおかまには軽く白粉をはたいた頬を小さな子供にやってみせるように指でつついて「いつおヨメさんに行くのかね」とこのごろ急速に上達して来た日本語で冗談口を叩いた。「でもね、アンリ、うちのおなかのなかのやあこのパパはフランス人でないみたい」とグエンは皮肉にやり返してから、「この子にフランス人とのあいのこを産んでもらうといいわ」と彼らの父親と言うよ

りは祖父という年齢の禿頭の老人に、その何気ない冗談口のやりとりのなかでグエンの日ごろの動向を探り出そうとする彼の内心のひそやかな動きを察知したようないやみを、まとめ上げて言えばそういうことばになる今は語学の才能がある海坊主のほうが格段にうまくなった日本語で口を出した。「わたしはおヨメなんかに行かない。ひとりで生きて行く」とおかまの口から思春期にさしかかった少女が一度は心にもなく言ってみせるセリフがひとりでに飛び出していた。同じようにひとりでに彼の顔はあかくなっても来ていれば同時にからだ全体が何かたとえようもなく羞ずかしげな快感で熱くなっても来ていたが、姉のグエンはその妹をすでに結婚の神秘をあますところなく知った既婚の女性の余裕をもった眼で眺めながら、妹の内心を見透かしたように「この子、ほんとは二度でも三度でもおヨメに行きたいよ」とまた皮肉な言い方で口を出した。おかまはおかまで、軽くしなをつくるように真紅のアオザイ姿のからだを心持ちねじらせるように動かしながら「一度だけでいい」と鼻にかかる声で応じながらまた顔をあからめる。その仲のよい姉と妹のサヤあてめいた応酬を海坊主は満足げに眼を細めて見ていた。

グエンはふだんは気のいい青年だったが――いや、白いハイ・ネックのスエーターにジーンズのズボンという男の服装をしているときにはがいしてそうだったが、いったん女装すると、ときどきおどろくほど妬みぶかくもなれば意地悪にもなって、露骨にいやみを口に出したりした。そんなときおかまが彼のほんとうにまるっきり人が変わったような変貌に手こずりながらも何か奇妙に讃嘆したくなるような気持になるのは、みごとにアオザイや大柄の花模様のカクテル・ドレスを着こなして、その姿でどう見ても女性としか見えない身のこなし方をしてみせるときよりもそのときのほうが女性らしさを感じさせたからだった。おかまのほうでもそうしたグエンに対していると、自然に彼の底意地のわるい中年女性めいた挙動が乗り移って来るのか自分でも奇妙に妬みぶかくもなれば意固地にもなって、グエンにことさらにさからっていやみを言いあうようになったりする。「グエン……」とおかまは意識して言い出すのではなかった。このごろはその白いワードローブのなかにきちんと畳み込んであずけっ放しにしてあるディオールの下着を身につけてアオザイを上に着るのと同時に自然に鼻にかかる声が口から出ていて、その声でそのまま「そのバッド、やっぱり大きすぎる。まるで牛のお乳みたい」といやみをつづけて言うと、自分がほんとうに女性になった気がした。いや、ときにはその気持になりたくて、おかまはことさらにいやみを口に出してもいた。

おかまはたいていはグエンの部屋の大きなダブル・ベッドのまえの白いワードローブ(には前面に鏡がついていて、

グエンの話だと、海坊主はグエンを抱きながら鏡のなかに二人の姿態をうつして見ているというのだった。「あんたもやってみたら」とときどきグエンはそう言ったあとでけしかけるようにおかまに言った）のなかのグエンの服を借りて着ていたが、一着だけ他に花模様が透かし彫りのようにして入った黒い絹のワンピースを持っていた。その肌ざわりのすべすべして気持のよいワンピースを着て同じ黒の大きなリボンのついたツバ広の帽子をかぶって黒いパンティ・ストッキングを穿いた長い脚を二本きれいに揃えて横坐りに気どったかっこうでストゥールに坐った写真を、おかまはカメラ・マニアで何台も高価なカメラを持つ海坊主に彼の高価なカメラのコレクションのなかでもとりわけ高価なスエーデン製のハッセルブラードの一眼レフ（は「文革」の大立物江青女史が愛用していたものだと、海坊主はその話のどこが面白いのかよく口にした。彼女に会ったことがあるとも、彼はときどき言った）で撮ってもらった何枚もの写真の一枚を小さな額に入れて自分の勉強部屋の机の上においていた。はじめのころおかまは、外出のたびごとに用心深く銀色のフレームのついた小さな額を机の抽出の奥深くに隠していたが、そのうちかえって自分をとりまく外界のすべてに挑戦するようなたかぶった気持で机の上においたまま外出するようになった。一度はそれはおかまが部屋にいるときだったが母親が入って来て、おかまとしゃべりながらときどき何気ないふうに眼をやるのを息をつめながらおかまはじっと見ていた。母親の表情から言って額のなかの写真の高価な洋服を身にまとった若い女性がおかまであることに彼女はあきらかに気づいているふうだったが、写真の若い女性のことはことさらに無視するように「紀彦ちゃん、アメリカの大学に行くのもひとつの手やで」とさっきからつづけてきたおかまの受験の話を何くわぬ顔でさらにつづけた。おかまはおかまで写真にわざと挑みかかるように視線をやってみせながら「うん」とか「ああ」とかまるで他人ごとのように気の乗らない相槌を打ってみせて、「紀彦ちゃん、わたしはあんたのことをしゃべっているんよ」とおしまいには母親を怒らせたが、彼はそれでもかまわず額のなかの黒いワンピースの若い女性を奇妙に羨望のこもったまなざしで眺めつづけた。おかまはもう来年春さきに迫った受験を投げていたが、そういう若い女性なら受験などという、そしてそのさらに先にある人生などという空おそろしいものとはまるっきり無関係にくらして行けるのにちがいなくて、彼女に要求されるのは、ただひたすらに可憐であること、優雅にその肌ざわりのよい黒いワンピースを着こなしていることだけであるのだ。実際、おかまの眼前の若い女性はその女性としてのカラクリを十二分以上に心得ていて、（男の子って、憐れね）とでもいうふうに、おかまをじっとみつめ返していた。

そのジバンシイのものだという見るからに高価な裾がフレアー・スカートになってひろがる黒い絹のワンピースはもちろんおかまが自分で買ったものではなかった。海坊主がグエンからでも彼のサイズを聞いたのかどこからか（ひょっとすると、「ラ・メーゾン・ド・ビッシュ」からではないかとときどきおかまは夢想した。その夢想とともに何かひどく残忍な快感がからだの奥深くから湧き上って来るのを感じて、おかまは異常に興奮もした）買って来て突然グエンの留守を見はからったようにおかまに手渡したものだったが、グエンにはこのことは黙っていろ、自分で買って来たものにしておけとすばやく必要な注意事項を指示するように高価なドレスの贈り主は言った。「あの子はわしが買ったと知るとハサミでズタズタに切るだろうね」と渾名の通りの禿げた大頭を上からおおいかぶせるようにして手渡された肌ざわりのよい黒いワンピースを膝の上にひろげながら何か呆然とソファに坐ったままになっていたおかまに近づいて来ると急に声を低めて皮肉な声で笑ったが、そのあとさらに声を低めて「これ、ここで着てくれるといいんだが……」といつになく遠慮した言い方でつづけた。「いいよ」と軽くうなずいておかまは身軽な動作で立ち上って白いワードローブのあるグエンの部屋に姿を消すと、いつもグエンの借り着を着るときとはちがった快感を全身に感じとりながらすばやくブレザーの制服を脱いで震える手で今はもう何枚か色とりどりのものを持った下着のなかから黒いのを選んで身に着けて黒いパンティ・ストッキングを穿いてから黒いワンピースの神秘を頭からひきかぶった。「帽子があったほうがよいだろう。」いつのまにか海坊主があとから入って来ていて、大きな姿見のまえに羞ずかしげに立つおかまの背後から手にたずさえて来たリボンのついたツバ広の帽子を、あたかもそれがおかまの女性への変身を完成させる最後のきめ手の魔法の冠でもあるかのようなもったいぶった手つきで、もとから長く伸ばしていた髪をこのごろ誰にも気取られぬように注意深くさらに伸ばし始めたおかまの頭の上にふうわりとかぶせた。ツバ広の帽子の下からかたちを少しくふうするだけでべつにカツラをかぶらずに女性のものとして通用するおかまの髪の毛が顔の両側にぐあいよく出て、たしかにおかまの変身は完璧だった。「ボン」と海坊主は大きく声を出してうなずきながら、姿見のなかのおかまと現物の彼とをひきくらべるようにゆっくり見たが、彼の眼が異様に熱気をおびて来ているのをおかまはそういうとき身の危険を本能的に察知する若い女性さながらにすばやく読みとるとすぐ、海坊主のまえをするりとすり抜けるようにして白いワードローブと大きなダブル・ベッドのあるグエンの部屋を出た。

出たところが狭い廊下のような空間で、その空間のベランダに面したフランス窓のガラスに黒いワンピースにツバ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

広の黒い帽子、黒いパンティ・ストッキングという黒ずくめの服装をしたおかまの全身がうつし出されていて、その姿はたしかにそんなときの若い娘のように無防備でたよりなげなもののように見えた。いや、無防備でたよりなげなところがかえって攻撃を誘っている。おかまはフランス窓のなかのおびえきったような自分の全身に対しながら、自分が今にもそのおびえきった若い女性に襲いかかる海坊主のように頭の禿げ上がった、しかしまだまだ十分に若い女性に襲いかかる力を持つ老人になったような、同時にまた自分がその襲いかかられる当の若い女性であるかのような二重に倒錯した気持をもった。いや、それは二重に倒錯した欲望の動きだった。欲望の動きの交錯のなかで、ツバ広の黒い大きな帽子をかぶったおかまの顔は奇妙にひきつって見えていて、限りなくきれいで限りなく醜かった。

そのあとおかまはその黒いよそおいの一式をこれもまた海坊主に買ってもらった黒いかっこうのよい中ヒールの靴といっしょにグエンのところにあずかってもらっていたが、ときどき「この洋服、あんたのパトロンの海坊主が買ってくれたんやで」とグエンに面とむかって言ってやりたい気になった。面白いことに彼がそんな何かしら残忍な気持になるのは当の黒いワンピースを着たときであれグエンからの借り着の純白のアオザイを身にまとったときであれ女の服装をしたときに限られていて、男の服装のままでグエンに対しているときにはおかまはまるっきりそうしたセリフもそうしたセリフを言い出しそうになる自分のこともきれいさっぱり忘れ去っていた。それが女の服を身につけたとたんにセリフが自然に心によみがえって来てもう少しのところで口から出そうになるのだが、そのときにはおかまはツバを噛みおろすようにして危うく黙り込みながらアオザイの姿のグエンがほんとうに大きな裁ちバサミで高価なジバンシイの洋服を海坊主と彼の見まもるまえでこれ見よがしにズタズタに切り裂いて行く光景を思い浮かべた。それはふしぎに興奮に満ちた光景で、思い描くだけでからだが熱くなったが、その心の画面にひときわあざやかに描き出された光景のなかではおかまは高価な黒いワンピースがただの黒いボロ切れの堆積と化したあと得意げに彼を見るグエンをまるっきり無視するように海坊主にむかってことさらに甘えかかった声で、「アンリ、今度はどんな洋服を買ってくれるの。やっぱり黒い服がいい。今度はお葬式に着るような黒いスーツにするかな」と強い口調で押しきるように言った。「誰のお葬式に着るスーツかね」と海坊主はちょっと皮肉に訊ね返す。

おかまはときどき女装したままでグエンのマンションから外に出た。はじめはグエンに連れられてこわごわ人気のない彼のマンションのあたりを、その附近にちょうど彼のマンションを上下にはさんでたつシナゴーグとモスクのあ

いだを上ったり下りたりしているだけだったが（この二人の女性としての散歩――と言うよりは歩行をことのほか面白がったのは海坊主だった。「二つのたがいにあいいれざる世界を往復するのは、あんたがたみたいに男と女というこれもまたあいいれざる世界を往復できる人間たちだけじゃないかね」とジバンシイのワンピースの贈り主の老人は笑った。「わたしはスパイよ」とグエンはアオザイの派手でぎらぎらする真紅の下の胸のふくらみをいっそう誇張するようにからだをそらせて老人の笑いにひときわかんだかい笑声で応じながら言った。「男の世界へ来たら、女のスパイ。女の世界では男のスパイ。シナゴーグではモスクのスパイ、モスクではシナゴーグのスパイ。わたしはスパイはスパイでも二重スパイよ。……」とそこまでヒステリックに笑っていたのが急に生真面目な顔で黙り込んだのは海坊主が唐突に「きみの兄さんは二重スパイをしていたんじゃなかったかね」と言い出したからだろう、グエンは一瞬の沈黙のあとで「あんたはどう、男と女の二重スパイなの」とおかまに話題を切り換えるように訊ねかかって来た。そのうち、正面の白壁に大きな星印をつけた平べったい建物とそれとは対照的に頂きに三日月のしるしをかかげた高いミナレットの尖塔を中心にした立体的な建物のあいだを女装の二重スパイに連れられて行き来しているのに飽きたおかまはひとりで歩行の範囲をひろげ出していた。黒いワンピースに黒いツバ広の帽子、さらに黒いパンティ・ストッキングに黒い中ヒールの靴という黒ずくめの女に変身した上での歩行の範囲だ。純白のアオザイはグエンからの借り着である上にやはりベトナム人の着物だったから、身にまとっていてもそれはどこか仮装だった。自分のものでないのを身につけて仮装行列にたわむれに加わっている。そんな感じがするのがいやで、おかまはひとりで歩くときにはその黒ずくめの服装をするようになっていた。それは借り着でもなかったし、仮装でもなかった。あくまで自分の服だった。そんないくぶんたかぶった気持でおかまはあくまで黒いワンピースの肌ざわりのよい袖に腕を通し、かっこうよく髪の毛をはみ出させるように鏡のまえで時間をかけてツバ広の帽子を慎重にかぶった。

その黒ずくめの女の服装をして歩くと、世界は一変して見えた。もちろんそれはおかまの気持が変化したというだけのことだったのかも知れないのだが、おかまは奇妙に自由になった気がしていた。来年春に迫った受験のことやらそこにいやおうなしにつながる未来のことやら、あるいは兄の健彦もろとも年上の女性の術策にあいかわらずていよくもてあそばれるかたちでずるずるとつづいている近藤美佐とのことやら、およそ男であることにつながるもろもろからスッパリと解放されたかたちで、その黒いいでたちをしたおかまは歩行の範囲を「ラ・メーゾン・ド・ビッシ

ュ」のある「異人館通り」からずっと下方の駅近くの繁華街に至るまでの広さに押しひろげてかまわず歩いた。もちろん男と見破られるのをおそれる気持はたえず心の底に動いていて、ときどきは通りがかりの店のショウ・ウインドウにうつる自分の黒ずくめの女性としての姿かたちをたしかめるようにして見ていたが、そのうち自由になったという気持のほうが自然にそこまで力を及ぼして来たのか、おかまはそのうちふっきれたようにもう人が自分をどう見ようが、男と見ようが化けものに見ようが、かまわない気持になり始めていた。もちろん、そこにはおかまが自分の黒ずくめの女性の姿にかなり自信を持ち始めていたということはあったにちがいなかったが、はじめはおどおどと人目をおそれるようにして歩いていてどうかするとむこうから人が来るのを見ると慌てて立ちどまってうしろを向いてやり過したりしていたのがこのごろでは逆に不審げに見る人に自分から近づいて行った。そんなときそ知らぬ顔をしてやり過すのはかえって先方で、そのたびごとにおかまは勝ち誇った、満ち足りた気持になった。

その街で出会ったさまざまな先方のなかにさつきも入っていた。見おぼえのある黒いブーツをはいたさつきに不意打ちのようにして出会ったのは「異人館通り」の中途のこのごろホーム・メイドのパイの店としてめきめき売り出して来た白い大きな壁を持った洋菓子店のまえだったが、いつもひとりで歩いているさつきには珍しくおかまの見知らぬ学校友達らしい同じ年ごろの少女二、三人とパイを片手に連れだって店から出て来るところに出会いがしらに会っていた。少女たちのなかでさつきだけがハッとしたようにおかまを見たのは黒ずくめの女性がおかまと気づいたからにちがいなかったが、おかまが顔を伏せもしないで彼女と今は同性の服装をした自分の全身をわざとあらわにさらけ出すような気持でさつきの痩せた白い顔を正面きってみつめながら歩きすぎて行くと、いつになく眼をそらせたのはさつきのほうだった。それはおかまがその一瞬までまるっきり予想もしていなかったことで、おかまはそのときはじめていつも彼のほうが押されがちだった二人の関係が逆転したようにも、彼女が彼から俊に相手をかえ彼は彼で意趣ばらしのようにして近藤美佐の事務所に入りびたり始めてなし崩しに二人の関係が崩れ去ってからもおかまは心のどこかでたしかに彼女がある日突然彼のところに立ち戻って来るのを待ち望んでいたのだが、その未練がましい気持から自分が完全に解放されたようにも思った。

さつきに出会ったあと、おかまはほんとうはいったん今はもう合鍵をもらって出入り自由になっていたグエンのマンションに立ち戻ってその週に一度のデイトのために近藤美佐が買ってくれた大人っぽいチャコオル・グレイの背広の上下に着替えるつもりだったのだが、しばらく街を歩き

まわって時間をつぶしたあと、その黒い女の洋服姿のままで待ち合わせ場所にこのごろ使い始めた地下に大きな駐車場のある山手のスナックへ行った。いつもそこから彼女の車でそのあたりにいくつもある連れ込みホテルのどれかに出かけて行くことにしていたのだが、ひところ使っていた「インペリアル・ホテル」をことさら彼女が避けているのは彼女のいうように健彦がそこでの二人の「密会」（と近藤美佐は耳慣れないことばを使ってから、「どう漢字で書くか、判る？　大学の試験に出るわよ」と嘲笑するように笑いながら言った）のことを嗅ぎつけたからかも知れなかったし、彼女がおかまの知らない他の誰かとの「密会」にそこを使い出したからかも知れなかった。いつかおかまがそうした話を遠まわしに言い出したときには近藤美佐は「わたしだって、そりゃ人なみにやっているわよ。一人前の大人の女ですものね」と機先を制するように大声で笑い出してから、「でもね、坊やちゃん、あなたのママほどはやっていないわよ。あなたのママはこのごろ男狂いでたいへんみたい。ホスト・クラブの男の子も連れて歩いたりして。まあ、あの人は一人前の大人の女じゃない。あの人は怪物、女の怪物」と笑いをキッとした表情で中断させながらそのこわばった表情にふさわしい堅い口調でにくにくしげにつづけた。

いつもはどのホテルを選ぶかは彼女が気まぐれに決めていたことでおかまはただ彼女のフィアットに乗せられてそこまで運んで行かれるだけだったが（近藤美佐はおかまが行先のホテルのことについて口を出すのを奇妙にいやがってちょっとでもその種の話をし出そうものなら、露骨にいらだった表情になってそっぽをむいた）、その日はちがった。ちょっとした高みにたったスナックの街路を見下す窓ぎわの席に珍しくさきに来て坐っていた近藤美佐は突然眼のまえに出現した黒ずくめの服装をした若い女性をおかまと見破ることができずにいて、「そこは人が来るんですのよ」と行儀知らずの若い女性に訓戒を垂れるようなもったいぶった口調でことばをかけて来るという失錯をやってのけた。それはそれだけで自然に今まで若ぶっていた外の表皮が破れて実際の年齢が無残に出て来た感じの失錯だったが、おかまが「ぼくやで、判らへんか、ぼくやで」とくり返したときにも聞きおぼえのあるおかまのまぎれもない男の声もよく聞きとれなかったのか、近藤美佐は「え、え」とまるで耳のよく聞こえない老婆が耳をそばだてるときそっくりの年齢の出た表情になった。おかまはとたんにこれまでに感じたことのないような勝利感を感じとってやにわに大声で笑い出していたが、もうそのときにはさすがに「白ブタ」と健彦と彼とがいつからか自嘲まじりに形容し出した白い下ぶくれのした顔の持ち主も眼前の黒ずくめの服装の若い女性が誰であるかに気づいたらしくて、「坊や

ちゃん、何、そのかっこう」と自分の不意を衝かれた狼狽をことさら押し隠すふうに叱りつけるように怒った口調で言った。

そのあとも近藤美佐は、よくもそんなかっこうで歩けたものね、男であることが見え見えよ、誰だって判るわ、恥ずかしくないの、わたしはそんなオカマさんといっしょに歩けないわとたてつづけに罵倒のことばを早口でしゃべりつづけたが、言えば言うだけさらにいっそう狼狽が上ずった声に出て来ていて、おかまは平気だった。また奇妙に対等になった感じにもなっていた。いや、彼女の上手にさえ立っていて、男の服装でいるかぎりおかまは彼女の指図通り動いてたかだかごほうびにディオールの下着をチャコオル・グレイの背広の下におずおずとそれが無限の秘密のよろこびでもあれば特典でもあるかのように着込ませてもらう情けない「坊やちゃん」だったのだが、黒い洋服に身を固めたおかまはもうそんな少年奴隷のような存在ではなかった。厚ぼったい生地の、それだけで野暮ったい感じのする胸もとの花模様が不釣合に大きいワンピースを着込んだ彼女同様におかまもその黒ずくめの姿で女性になっていて、そこで彼は彼女と同じ平面に立っていた。いや、年齢がかくだんに若いだけに、彼という女性は彼女という女性の優位に自然に立っていた。

「この黒いワンピース、ぼくにピッタシやろ。」

おかまは近藤美佐の早口の罵倒の羅列をたたき切るようにさえぎった。声は純白のアオザイであれその黒いドレスであれ女装したときに自然に口から出るようになる鼻にかかった声になっていたが、口調はいつもの男でいるときの彼よりも激しい正面きって挑みかかるような口調になっていた。

「やっぱり、ジバンシイのもんはちがうねん。」

そうことばを眼の前の白い下ぶくれのした顔にまともに投げつけるように言いながら、動作は口調とはうらはらに心持ち首をかしげるようにして軽くしなをつくりながらスナックへ入ってからまず手洗いに入って新しく口紅をつけなおした口を思いきり大きく開いて微笑した。それはおかまの母親の得意なポーズだったが、おかまは今自分はたしかに母親のように大輪の花の微笑を顔いっぱいに押しひろげているのだと勝ち誇ったような気持でしきりに思った。

「美佐さん……」とおかまの口から、いつもの「お姉さん」の代りにその呼び方が自然に口をついて出ていた。近藤美佐はまた不意を衝かれたように「え?」と意外な顔をしたが、窓ガラスにうつるその「美佐さん」という名の年齢相応のくたびれと醜さとがさっきからあざといまでに表情に出始めた女性にむかって、口紅のあざやかさと表情の若々しさがむごいまでに彼女と対照的に目立つ年若い女性が笑いながらつづけた。

「この洋服にどんなコートが似合うやろか。やっぱり、毛皮やろか。」
「さあ、どうかしらね。毛皮は高いからね。ウサギなんか安っぽすぎるし、……そうね。ラムなんかいいのとちがう」と思わず年上の女性が年下の同性の友達にむかって言う口調で応じたところで近藤美佐は自分が途方もない悪ふざけに引き込まれようとしているのに今ようやくおくればせながら気づいたように、「何、坊やちゃん、言っているのよ。あなたは男の子よ。男の子に毛皮のコートなんて、何、ほんとうにあなたは言っているのよ」とまた怒った声を出した。「坊やちゃん、あなた、これでほんとうに女の子に見えると思っているの。」近藤美佐は嘲笑するようなうすら笑いを頬に浮かべながら、黒ずくめの洋服一式に包まれたおかまの全身をあらためて眺めまわすように見てから、さっきからくり返して来たセリフをとどめを刺すようにもう一度口に出していた。「見えると思っているんやで」とおかまは鼻にかかった声ながらまぎれもない男のものである声で言ってから、「そやけど見えへんかて、かまへんのやで」とも同じ男の声でつづけた。
近藤美佐がいつになく口惜しそうに黙り込んでしまったのは、おかまがそれだけのセリフを奇妙に迫力に満ちた言い方で言ってのけたからだけではなかったにちがいない。おかまは言い足りなかったことを動作でおぎなうようについと立ち上がると、黒いパンティ・ストッキングに包まれたかたちのよさをひそかに自負している長い脚をファッション・モデルがときどきやってみせるように左右に大きく踏んばって開いておどろいた顔で呆気にとられたように自分をみつめる近藤美佐のまえに立ちはだかった。とたんにフレアーのついたワンピースの裾がきれいにひろがって、おかまは満ち足りた気持になった。その気持のままで（どう？）というふうに挑みかかるような眼で近藤美佐を見下ろしながら「じゃあ、行こうか」といつもなら近藤美佐のほうが言い出すセリフを口に出した。いや、そのあとつづけてこれもいつもなら彼女が皮肉まじりに馬鹿にしたように口に出すセリフも「あんたを抱きにね」とまだファッション・モデルの動作をつづけるおかまの口から自然に出た。低いがしっかりした声だった。その声でおかまの口紅の紅があざやかな口から出ていた。
「いったいどこへ行こうというの」と近藤美佐はおかまの二つのセリフに気押されたようにいつも言ったことのなかったことばを口に出した。
「ホテルに行くんだよ。」
おかまの彼女の質問をそのまま押し返すような言い方にたじろいだように近藤美佐はまたいつも言ったことのなかった質問を「どのホテルに行くの」と気弱に口に出していた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com